

異文化研究交流センター ニューズレター

猛暑のあと

センター長 坂本 千代（国際文化学研究科 教授）

当センターの活動は前期より後期のほうが行事が多く忙しいのですが、9月は少し時間的に余裕のある時期です。たいへんな猛暑の夏のあとですから、ぜひ穏やかで美しい秋、食欲と勉学の秋になってもらいたいものです。さて、良いニュースがあります。センター協力研究員のアラムスさんが、第12回アジア太平洋研究賞（井植記念賞）を8月に受賞しました。また、常勤の研究職が決まった協力研究員もいます。センターの組織を活用して教員、研究員、学生が自分の研究をさらに広げ深められる機会をこれからたくさん作っていきたいと考えています。

今年に入ってからIReCではさまざまな行事を開催してきましたが、その中には、同じ研究科内のもう一つのセンターであるメディア文化研究センターと協力しておこなったものがあります。5月10日（金）には明治大学から高山裕二 講師をお招きし、IReC『南北アメリカにおける異文化の共存・葛藤・融合』プロジェクトとメディア文化研究センター『メディアの変容と文化の公共性』プロジェクトの共同研究セミナー「アレクシ・ド・トクヴィルの異文化体験」を開催し、学内外からの参加者を交えて活発な議論がありました。また、両センターの学術推進研究員と協力研究員有志が「コミュニティの『共創』戦略と市民的公共性」というプロジェクトを立ち上げ、その第1回研究会「ベトナム反戦から内なるアジアへ——ベ平連神戸の軌跡」（発表者：黒川伊織さん、メディア文化研究センター協力研究員）が8月6日（火）におこなわれました。このプロジェクトは今年度中にまだいくつか催しを予定しています。

このように国際文化学研究科内のふたつのセンターが共同する企画が目立つようになる一方で、両センターができて数年が経過し、神戸大学、本研究科およびセンターを取り巻く状況は大きく変化してきています。そこで、両センターがこれまでおこなってきた活動の成果をふまえ、当初予想されていなかった問題点やあらたな可能性などを考慮し、ふたつのセンターをひとつにして体制の強化を図り、より効率的で研究科の現状にあった組織にするための準備が始まりました。ふたつの既存の組織を融合しようとしているわけですから、さまざまな問題・課題を解決しなければなりません。スムーズに統合計画が進むかどうかはまだわかりませんが、メディア文化研究センター長と協力して、猛暑のあとを「改革の秋」にしてがんばっていきたいと思います。



「アレクシ・ド・トクヴィルの異文化体験」
（5月10日）会場の様子

● 2013 年度 学術推進研究員 清川 祥恵

● 2013 年度 協力研究員と研究テーマ

- ・アラムス「清代内モンゴルにおける農地所有とその契約に関する研究——帰化城トゥメト旗を中心に」
- ・尹 永 順「『盛京時報』と谷崎文学」
- ・植 朗 子「グリム兄弟『ドイツ伝説集』におけるモチーフ研究」
- ・王 娟「日本占領下の華北地方における教育活動」
- ・鬼頭尚義「歌人伝説の形成と展開」
- ・シーリン「清代モンゴルにおける書記 および 書記の養成に関する研究」
- ・高岡智子「東ドイツとハリウッド映画音楽の比較研究——文化政策とメディア史的観点から」
- ・寺尾智史「『リキッド化する社会』における言語多様性保全」
- ・南郷晃子「近世紀における領主権力をめぐる説話の生成と展開」

- ・沼田里衣「音楽療法、コミュニティアートにおける創造的音楽活動について」
- ・野村恒彦「19世紀英国科学者の大陸旅行（グランドツアー）」
- ・松井真之介「フランスにおける多文化共生と多文化教育の可能性——地域語学校・バイリンガル学校を例に」
- ・山口隆子「ホームステイ活動における伝統と生活文化の表象、「ホームステイのメカニズムを観光人類学から読み解く」
- ・山田勲之「清代雲南ナシ族に関する歴史研究——ナシ族の首領木氏を中心に」「チベット自治区ラサ市における観光産業発展の動態」
- ・劉 澤 軍「文の結束性に関する中国人日本語学習者の使用実態について」

2012・2013 年度活動報告

(2013 年 1 月～9 月)

研究部

(部長：坂井一成 教授)

研究部では、2012 年度は「EU の内と外における共生の模索」をテーマに研究活動を進めてきました。2013 年 1 月 11 日に九州大学の八谷まち子氏を招き、アラブの春という EU の南岸に当たる地中海地域での政治・社会変動を背景に、トルコの EU 加盟問題がどのような意味を持っているかについて議論を行いました。ヨーロッパとアジアの境界、キリスト教世界とイスラム教世界の境界に位置するトルコは、まさに EU が内と外とで共生を進めていくための様々な課題が露見する場となっていると言えます。



「アラブの春とトルコの EU 加盟の新たな課題」(2013 年 1 月 11 日)
講演会で談笑する八谷まち子氏(左)

研究部プロジェクトの一環として、2 月 6 日にはブリュッセル自由大学(VUB)(蘭系)を会場に、「政治・経済・社会の劇変と EU におけるアイデンティティ形成」をテーマに日欧国際ワークショップを開催しました。ここでは、Kolja Raube 氏(ルーヴァン・カトリック大学)、齋藤剛氏(神戸大学国際文化学研究科)、村尾元氏(神戸大学大学院国際文化学研究科)、Noemi Lanna 氏(ナポリ東洋大学)から報告を得て、コメンテーターとして西田健志氏(神戸大学国際文化学研究科)、松井真之介氏(神戸大学国際文化学研究科メディア文化研究センター)、Dimitri Vanoverbeke 氏(ルーヴァン・カトリック大学)、岩本和子氏(神戸大学



ブリュッセルワークショップ(2月6日)の参加者

国際文化学研究科)による議論の提起と、ヨーロッパ・日本の多くの研究者・学生を含むフロアを交えた全体討論を行いました。これらを通じて、①「アラブの春」が EU 市民のアイデンティティや政治意識にもたらした影響、② EU 内でのアイデンティティ形成におけるソーシャルメディアの重みの増加、③ EU におけるアイデンティティの変化が日 EU 関係といった対外関係に及ぼしている影響について議論が行われ、EU 研究の深化とともに日欧の研究協力の深化とネットワーク拡大においても進展を図ることができました。

2013 年度は、「EU アイデンティティの構築とその政治的意義」をテーマとして講演会・研究セミナーを行ってきています。7 月 25 日の川村陶子氏(成蹊大学)を講師に迎えての講演会では、ドイツの対外文化政策の変容について、20 世紀から 21 世紀にかけての長期スパンのなかでこれを捉え直し、とくに第二次大戦後の EC/EU 統合の進展のなかでの位置付けや変容について議論を深めることができました。



「ドイツ対外文化政策の変容」(7 月 25 日)
上：川村陶子氏、下：会場の様子



「分断から統合へ？」(8 月 1 日)
講演する仙石学氏

8 月 1 日に行った研究セミナーは、仙石学氏(西南学院大学)を講師に迎え、EU 統合を含めた国際政治環境の変化のなかでのポーランドの国境線をめぐる政治・社会・文化状況の変化とその意義について、コメンテーターとしての青島陽子氏(神戸大学国際文化学研究科)による議論も踏まえ、EU とその境界線について、アイデンティティをめぐる政治問題の観点から熱い議論が交わされました。

EU をめぐっては、加盟国拡大と近隣地域との微妙な関係構築が進められるなかで、統合の深化・拡大における文化的要素が果たす役割について一層の解明が求められており、今後ともその探究に勤しむ必要が明らかになってきたと言えます。

国際部

(部長：岩本和子 教授)

国際部は、国際交流委員会管轄の海外協定校とのコネクションも生かしつつ、国際交流促進、特に海外の研究者との学術交流に重点を置き、中心的な活動として海外の研究者による講演会の開催を行います。教員や院生、さらに学部生にも広く聴講を呼びかけ、学術交流とともに、交換留学やダブル・ディグリー・プログラム留学への意識を高め、外国語での講演聴講に慣れる機会ともなっています。今後の、協定校との教員交換授業の促進、準備にも貢献できると考えています。

2013年1～9月には次の活動を行いました。2012年度第5回講演会として、協定校のレンヌ第1大学経営学部 Karine PICOT-COUCHEY 准教授による "Understanding Growth Strategies in Retailing: From Internationalization to the Development of New Retail Formats" (2月22日) を開催し、研究科・学部初の海外からの出張集中講義中でもあり、学生や研究科内外の教員の参加がありました。フランスのファッションマーケティングに関する最新の研究のご紹介を軸に、Pop-up store の紹介、日仏の比較など興味を惹かれる内容でした。講演も質疑応答も英語でしたが学生からも活発に発言があり充実したものになりました。



"Understanding Growth Strategies in Retailing" (2月22日)

Karine PICOT-COUCHEY 先生と会場の様子

年度末には2013年度に国際部主催で行った5回の講演会での発表内容をすべて報告書に掲載し公表しました。

2013年度第1回講演会として、リエージュ大学（ベルギー）の Jean-Marie KLINKENBERG 名誉教授による「Les littératures francophones septentrionales : constances et convergences 北方フランス語圏文学の特徴と共通性」(5月27日) を日本フランス語教育学会 (SJDF) などの後援も得て開催しました。文化の絶対的な中心地フランスに対するフランス語圏周縁地域、特に北方諸国の文学の特異性と意義を探るもので、言語や文学を通して異文化理解の問題も考えさせてくれました。学部生の参加も多く、またや学外からも多くの方にお集りいただき、フランス語による講演（通訳は学

振特別研究員 PD の三田順氏）と質疑応答（通訳補助岩本和子）が、講師のエネルギッシュな人柄もあって、活発に行われました。



「Les littératures francophones septentrionales : constances et convergences 北方フランス語圏文学の特徴と共通性」(5月27日)

左：質問に答える KLINKENBERG 先生
下：会場の様子



また第2回講演会として、10月1日にヴェネツィア カ・フォスカリ大学の Fabrizio EVA 客員教授による「European Vision of the Global Geopolitical Dynamics in Comparison with the Asian (and Japan) Perspectives」を開催するほか、本年度中にさらに2、3回の講演を予定しています。国際部が現体制になって2年目に入りましたが、このように順調に活動ができていますのも、教員の皆さまの海外での活発な研究活動や交流に支えられてのことです。改めて本研究科の国際交流ネットワークの広がりを感じました。また国際部の活動自体もこれから一層の学術交流促進の一助となれば幸いです。

連携事業部

(部長：岡田浩樹 教授)

連携事業部の活動は、(A) 連携協定に基づく地域連携事業、(B) アートマネジメント関連事業、(C) JAXA との連携協定に基づく事業の3つのカテゴリーに区分されます。2012年1月から9月まで、それぞれのカテゴリーで盛んな活動を行いました。

A 連携協定に基づく地域連携事業

連携協定に基づき、(1) 兵庫県国際交流協会、(2) 在日外国人支援諸団体、(3) 南あわじ市と地域連携事業を共同で実施しました。

(1) 兵庫県国際交流協会が主催する Oxbridge English Summer Camp の実施校として、英国 Oxford, Cambridge 大学の海外英語教育実習に協力、8月5日から18日までの2週間、英国から6名の学生が来日し、国際文化の学部生40名が参加して英語のレッスンを受けると共に、交流を行いました。また、兵庫県国際交流協会が実施した「地域の国際交流プログラム」に Camp 参加学生も参加し、地域住民との交流も行いました。



2013 Oxbridge ミニツアー集合写真

(2) については、神戸定住外国人支援センタにおいて、国際文化学研究科大学院生と地域住民や他大学の研究者との研究会（通称「長田研究会」）を月に一度のペースで開催するとともに、学生ボランティアの派遣などを行いました。

(3) については、昨年度に引き続き、南あわじ市で開催されるアジアこども国際映画祭の実行委員会に岡田教授が加わり、企画・運営に協力しました。

B アートマネジメント関連連携事業

藤野教授のアートマネジメント研究会を基盤として、神戸芸術祭における企画参加、研究会の開催に加え、ドイツからの研究者を招聘し、2013年3月11日(月)に「国際文化交流フォーラム」を実施しました。そのテーマは「自治体の文化振興はどうあるべきか？ ドイツの先進事例から考える」です。会場の神戸市中央区の生田文化会館大ホールは120名を越える参加者がありました。慢性的な財政難と行財政改革によって先進国の自治体文化政策にも構造転換の荒波が押し寄せています。ドイツの公共文化予算は日本の10倍以上ですが、地方自治体が主体となってきた点では共通しています。このフォーラムでは、日独の文化政策研究の第一人者が参加

し、地域主権にもとづく文化政策の先進国であるドイツの理念と実践事例をふまえて、自治体の文化振興は本来どうあるべきかについて根本から考える時期にきています。この課題をめぐり、ドイツ・ヒルデスハイム大学文化政策研究所所長のシュナイダー教授の基調講演に続き、同研究所研究員のゲツキー氏が EU 特にドイツと EU における報告を行い、帝塚山大学の中川幾郎教授、静岡文化芸術大学の松本茂章教授が日本、そして神戸に関する報告をされ、活発な討論を行いました。

C JAXA との連携事業

国際文化学研究科は、2011年6月に JAXA（宇宙航空研究開発機構）大学・研究機関連携室と連携協力交流協定を締結しました。2013年4月から連携協力事業の一つとして、人文社会科学系の学生に対する宇宙教育を目的とした「宇宙文化学」を開講しました。他大学の研究者に加え、JAXA からは4名の講師が派遣されました。また JAXA の施設（JAXA 相模原キャンパス）を使った学外見学を実施しました。JAXA との連携講義は、IT、GPS、衛星放送など、グローバル化の背景となった宇宙開発技術とそれがもたらす社会的・文化的変化の問題に学際的にとりくむ内容であり、国際文化学部の学際的性格、今日的課題に取り組む姿勢を涵養するという教育理念に合致します。また21世紀に必要な専門的教養を修得させる意味でも、有益な内容となることが予想されます。なお、JAXA は本学部の講義を今後関西諸大学、全国の人文社会科学系で展開する予定の「宇宙教育」のパイロットケースとして位置づけています。

研究の面では、板倉准教授を代表とする NHK アーカイブの利用プロジェクトにおける JAXA との共同研究が開始されています。また、JAXA の協力・サポートを受け、岡田教授、西田准教授が6月に名古屋で開催された「ISTS：国際航空宇宙工学会」で発表するなど、様々な進展を見せています。



JAXA 相模原キャンパス見学会の様子

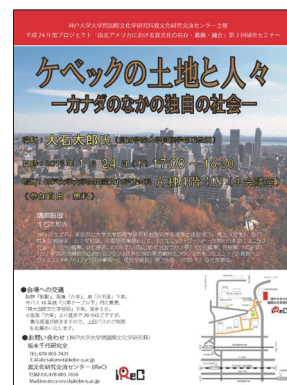
活動一覧

2012 年度

- 1月11日 研究部主催・第4回講演会「アラブの春とトルコのEU加盟の新たな課題」（八谷まちな・九州大学法学研究院教授、EUIJ九州代表）
- 1月24日 異文化研究交流センター主催、平成24年度プロジェクト『南北アメリカにおける異文化の共存・葛藤・融合』第3回研究セミナー「ケベックの土地と人々——カナダのなかの独自の社会」（大石太郎・関西学院大学国際学部准教授）
- 2月6日 神戸大学国際文化学研究所主催（神戸大学国際文化学研究所異文化研究交流センター共催）国際ワークショップ「政治・経済・社会の劇変とEUにおけるアイデンティティ形成」をブリュッセル自由大学（VUB）にて開催
- 2月7日 異文化研究交流センター・ブリュッセル王立音楽院共催「第43回ベルギー研究会」を神戸大学ブリュッセルオフィスにて開催
- 2月22日 国際部主催・第5回講演会 "Understanding Growth Strategies in Retailing: From Internationalization to the Development of New Retail Formats" (Karine PICOT-COUCPEY・レンヌ第一大学経営学部准教授)
- 3月11日 国際文化交流フォーラム「自治体の文化振興はどうあるべきか——ドイツの先進事例から考える」を神戸市生田文化会館にて開催

2013 年度

- 5月10日 異文化研究交流センター『南北アメリカにおける異文化の共存・葛藤・融合』プロジェクト、メディア文化研究センター共同研究『メディアの変容と文化の公共性』プロジェクト、第4回研究セミナー「アレクシ・ド・トクヴィルの異文化体験——若きフランス貴族はアメリカで何を目撃したのか」（高山裕二・明治大学政治経済学部専任講師）
- 5月27日 国際部主催・2013年度第1回講演会「北方フランス語圏文学の特徴と共通性」(Jean-Marie KLINKENBERG・リエージュ大学名誉教授)
- 7月25日 研究部プロジェクト「EUアイデンティティの構築とその政治的意義」2013年度第1回講演会「ドイツ対外文化政策の変容——ヨーロッパ統合進展の中で：新たな一歩か、原点回帰か」（川村陶子・成蹊大学文学部国際文化学科准教授）
- 8月1日 研究部プロジェクト「EUアイデンティティの構築とその政治的意義」2013年度第2回研究セミナー「分断から統合へ？——ポーランド国境における『分断された領域』のシェンゲン後を比較する」（仙石学・西南学院大学教授）
- 8月6日 異文化研究交流センター・メディア文化研究センター主催、「共創」社会研究会、第1回講演会「ベトナム反戦から内なるアジアへ」（黒川伊織・メディア文化研究センター協力研究員）



IREC NEWS

当センターの阿拉木斯（アラムス）協力研究員の論文「清代内モンゴルにおける農地所有とその契約に関する研究——帰化城トゥメト旗を中心に——」が、第12回アジア太平洋研究賞（井植記念賞）を受賞し、8月2日に授賞式が行われました。

遼寧省図書館を訪れて

協力研究員 尹 永 順

私の研究課題は谷崎文学が「満洲」、特に中国語新聞「盛京時報」においてどのように翻訳され、受け入れられてきたのかを検討することである。

「盛京時報」は日本人・中島真雄が1906年に奉天（瀋陽）で創刊した「満洲」初の中国語新聞であり、1944年に「康徳新聞」に合併され、1945年に廃刊となった。2013年8月1日から8月6日にかけて、「盛京時報」の資料を集めるために、中国で唯一「盛京時報」のデータベースを有する遼寧省図書館を訪れた。遼寧省図書館は「盛京時報」の発行地であった奉天、つまり現在の瀋陽に位置している。「盛京時報」が「満洲」時代の政治、経済、文化など多様な情報を知る貴重な資料であることが認められつつ、遼寧省図書館では「盛京時報」の影印、マイクロフィルムだけではなく、データベースも構築した。このデータベースはタイトル、副題、著者名、コラム、出版年月日、巻号、ページなど様々なキーワードで検索することができるため、ほぼ40年にわたる膨大なデータを簡単に収集、統計できた。



遼寧省図書館

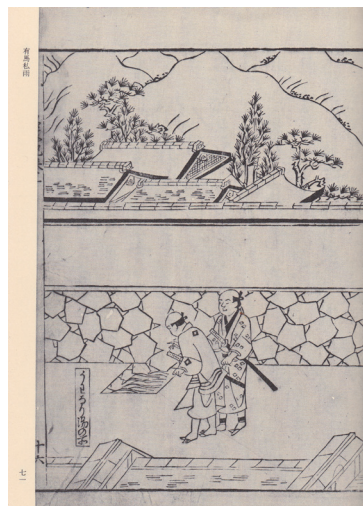
「盛京時報」に掲載された谷崎文学に関わる資料には、『麒麟』、『金と銀』、『春琴抄』の中国語訳、「訳者誌」、「芸拓訳言」などが見られた。これらの翻訳と文章はすべて長年文芸欄「神皋雑俎」の編集を担当した穆儒丐が執筆したものである。穆儒丐が谷崎文学を真っ先に選んだのは、谷崎潤一郎が日本を代表するような「芸術の天才」で、その作品は緻密な描写が優れていて、文芸に志す中国の青年たちに役立つと確信したからである。「芸拓訳言」でも、人生の芸術化、緻密な描写、病的な心理描写を取り上げて『金と銀』を高く評価した。また、『麒麟』、『金と銀』の中国語訳には注が一つもないが、十数年離れて連載された『春琴抄』の中国語訳には日本の語彙と文化に注がこまめに付けられているように、異なる翻訳方略を用いた。これらの資料を「満洲」の社会情勢、「盛京時報」の特徴と関連付けて、今後さらなる考察を試みたい。

「女」と近世説話—有馬妬湯^{うわなりゆ}—

協力研究員 南 郷 晃 子

8月31日、9月1日と神戸大学で西行学会が開かれた。1日午後は有馬実地見学であり手伝いとして同行させていただいた。

有馬には伝承を伴う源泉がいくつかあり、うち一つが「妬湯」（うわなりゆ）である。『摂津名所図絵』には女子が「盛粧」をしてその前に立つと湯が沸き立つとあり、現在一般知られるのはこの伝承である。他方『有馬私雨』には、湯の前で「おのれは人のをのこぬすみとつて、さりとて卑怯ものかな」とののしると湯が沸き立つと記されている。うわなりは「後妻」とも書き、前妻が後妻を痛めつけ、湯に沈めたなどの伝承があったかと想像する。



うわなり湯（『有馬私雨』より）

女性の嫉妬が怪異譚へと転ずる話は近世期数多くある。好んでおぞましい女の嫉妬が語られるのは、一つには語り手が主に男性であったためであろう。しかしそれが妬湯のように場所にともなう伝承である場合、「地母神」という言葉に象徴されるような、大地そのものを女の姿で捉えるという信仰を背後に想定することができる。突発的に湯が吹き出す源泉の「うわなり湯」という名は、意のままにならぬ大地に近世的な枠組みを与えたものと解せよう。

女性の嫉妬が怪異譚へと転ずる話は近世期数多くある。好んでおぞましい女の嫉妬が語られるのは、一つには語り手が主に男性であったためであろう。しかしそれが妬湯のように場所にともなう伝承である場合、「地母神」という言葉に象徴されるような、大地そのものを女の姿で捉えるという信仰を背後に想定することができる。突発的に湯が吹き出す源泉の「うわなり湯」という名は、意のままにならぬ大地に近世的な枠組みを与えたものと解せよう。



現在のうわなり湯

日本の近世期の説話で「女」は妬み、執着し、祟る。言わば男性原理のうちに表象されるが、同時に男性的な秩序を揺るがすものでもある。例えば「女」の祟りで家が断絶する話は「女」が「家」の存続を決定している。祟られるのが領主家ならば国支配の交替を「女」が決定するのである。男へ執心し妬み祟る「女」の話をどう解するか。伝承世界における「女」像の再構築を目論んでいる。

場所にともなう伝承である場合、「地母神」という言葉に象徴されるような、大地そのものを女の姿で捉えるという信仰を背後に想定することができる。突発的に湯が吹き出す源泉の「うわなり湯」という名は、意のままにならぬ大地に近世的な枠組みを与えたものと解せよう。

人びとの暮らしに目を向けること

協力研究員 山口 隆子

私は、普通の人びとの日々の暮らしに目を向け、彼らと生活を共にすることによって異文化理解を目指すホームステイを研究している。2013年5月の2週間、延べ38名の日本人が、アメリカに本部を置く非営利組織「大人のためのホームステイ組織F(仮称)」の渡航プログラムで、ドイツへ出かけた。私はそのうちの男女19名(平均年齢66歳。夫婦5組と女性同士のペアが5組)の引率責任者になり、ニーダーザクセン州の小さな町で1週間のホームステイを体験した。

グローバル化の時代で情報が溢れてはいても、参加者の渡欧経験が豊富にあっても、多くのゲスト達の不安は、ホストの普段の生活ぶり・暮らしのありようが分からないことだった。彼らはこれまでの団体観光旅行におけるイメージをなぞり、またステレオタイプの見方が先行しがちであり、日本から青汁やティシュペーパーを箱ごと持参した者が数人いた。ホストから女性のペア用に「ダブルベッド」の用意があると示



「1936年から続く」民俗舞踊団を招いてのフェアウェルパーティでの一場面。

そして、ホスト側から聖霊降臨祭の3連休に「ハイキングと伝統的な射撃祭のどちらを選ぶ?」と打診があった。伝統的な行事は、日常生活のハイキングと同等に括られて、ゲストに呈示された。多くの出来事がホームステイの現場で起きている。

ゲスト達は、ホームステイ中に「食生活が豊かだし、実に心地よい暮らし」、「ホスト達も私達と同じなのだ」などといっ



ホスト側が用意した地元の射撃祭、シュützenフェスト(Schützenfest)。地元の人びと500名の中に20名の日本人が参加。

された時のゲスト女性達の混乱と、のちにダブルベッドとはシングルベッドがふたつ並列の状態だと理解した時の安堵感。ホストの生活を尊重し、馴染もうと努力をしても、自文化中心主義的な視点を拭うことが難しい証左であろう。

た感想を何度ももらった。帰国後にゲスト達から体験談を聞き取る毎日だが、時間の経過と共に、彼らの印象や感想が変化していつている。この体験をひとつの事例として、今後の研究に向けて、更なる理論の精緻化を探究中である。

中世主義と社会運動

学術推進研究員 清川 祥恵



ゴシック様式(向かって左)とロマネスク様式(同右)の尖塔をもつフランス・シャルトルの司教座聖堂。

今年度は、当センターおよびメディア文化研究センターの研究員有志と協力し、プロジェクト「コミュニティの『共創』戦略と市民的公共性」を立ち上げると同時に、国際化学研究科の教員・院生および外部の研究者と合同で行な

う研究プロジェクト「世紀転換期の大西洋をはさんだアングロサクソン世界の思想交流」にもスタートメンバーとして参加させていただくことになった。いずれにも、個人研究であるヴィクトリア時代の中世主義思想、とりわけ詩人かつデザイナー、社会主義者でもあるウィリアム・モリスの文学作品にみられる思想についての研究を基盤として関わっている。

前者については、去る8月6日に第1回研究会が開催され、ベ平連こうべが世界規模の平和運動から地域に密接に結びついた社会問題へと目を向ける過程とその意義について、神戸大学メディア文化研究センター協力研究員の黒川伊織氏にご解説いただいた。10月にはひきつづき第2回研究会を実施する予定であり、さらに年内には19世紀のゴシック様式の復興運動を通して市民的公共性について考察する、私自身の研究発表を計画している。

また、9月17日には、2つ目のプロジェクトの第1回研究会を開き、成蹊大学法学部准教授の平石耕先生をお招きして、ご高書『グレアム・ウォーラスの思想世界——来るべき共同体論の構想』(未来社、2013年)について論評させていただいた。ウォーラスはモリスが主宰する社会主義の集會に参加しており、その思想にはすくなく影響もみられるが、モリスとはまったくちがうかたちで20世紀初頭に深刻化する「巨大社会」の諸問題に対処しようとした。ふたりの芸術観を通しての比較を試みたところ、平石氏からは真摯なご回答とご助言を頂戴し、またプロジェクトメンバーと闊達な意見交換を行なうことができた。今後は20世紀以降の思想展開や影響関係もふまえ、より多面的にモリスの思想を検討していきたい。



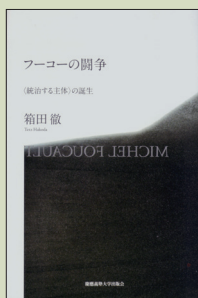
モリスが日曜集會を開いた自宅付近より、テムズ川を臨む。

研究員出版物

当センター 2009 年度学術推進研究員（現・立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員）箱田徹氏、および当センター本年度協力研究員である植朗子氏の研究成果が公刊されます。ここに著者の両氏からのコメントとともにご紹介いたします。

フーコーの闘争 —〈統治する主体〉の誕生—

箱田 徹、慶應義塾大学出版会、2013 年 9 月 20 日、2,500 円 + 税



抵抗と権力という二元論的な図式から、統治による一元的な理解へ——本書は、統治性、生政治、生権力といった概念と批判的な距離を取り、ポスト 68 年 5 月のラディカルな社会哲学として、フーコーを読みます。とくに「後期」と呼ばれる、1970 年代後半から 80 年代の彼の思索は「統治」の観点から明確に捉えることができると論じました。この時代のフランス社会哲学を論じた、クリスティアン・ロス『68 年 5 月とその事後の生』（インスクリプト、近刊）の拙訳も、ぜひ併せてお読みください。

『ドイツ伝説集』のコスモロジー —配列・エレメント・モチーフ—

植 朗子、鳥影社、2013 年 6 月 27 日、価格 1,800 円 + 税

本書は、グリム兄弟の編纂書である『ドイツ伝説集』の内面を明らかにする試みとして、その伝説配列から全体の構成を論じ、伝説グループの要素となるモチーフとそのエレメントについて検討した。『ドイツ伝説集』は『グリム童話集』、『ドイツ神話（学）』と並ぶ、民間伝承蒐集のさきがけとなった作品であるが、文学的視点に立った研究はこれまでなされてこなかった。しかし、伝承の海から拾い上げられた数々の伝説は、『ドイツ伝説集』のかたちをとって、その自然観ひいては宇宙観（コスモロジー）を織りなした。



異文化研究交流センター ニューズレター 第 4 号

発行日：2013 年 9 月 30 日

編集・発行：神戸大学大学院国際文化学研究所・異文化研究交流センター

連絡先：〒657-8501 神戸市灘区鶴甲 1-2-1

電話・FAX：078-803-7650

E-mail: irec@ccs-srv.cla.kobe-u.ac.jp

ウェブサイト: <http://web.cla.kobe-u.ac.jp/group/IREC/>

印刷所：神戸大学生協同組合

2013 年 10 月以降の予定

2013 年

10 月 1 日 国際部主催・2013 年度第 2 回講演会 "European Vision of the global geopolitical dynamics in comparison with the Asian (and Japanese) perspectives" (Fabrizio Eva ヴェネツィア カ・フォスカリ大学客員教授)



10 月 30 日 異文化研究交流センター・メディア文化研究センター主催、「共創」社会研究会、第 2 回研究発表会

このほか、11 月以降も講演会・セミナーを含む多数のイベントを企画しております。詳細が決定しましたら、当センターのウェブサイト等で告知させていただきます。

編集後記

今年度のニューズレターは例年より早い 9 月末の発行ということで、記載する内容がすくないのでは、と密かに危惧しておりましたが、受賞や出版などのおめでたいニュースが相次ぎ、大変充実した号となりました。原稿をお預けいただいた皆様のご協力に、この場を借りて御礼申し上げます。今秋以降の活動にもご期待いただければ幸いです。

（学術推進研究員：清川 祥恵）



◆交通アクセス：阪神「御影」、阪急「六甲」、JR「六甲道」下車。市バス 16 系統「六甲ケーブル下」行に乗車。「神大国際文化学部前」下車。徒歩 3 分。